

# 個人による震災被害記録と客観性

—善光寺地震の新出史料をめぐつて—

原 直 史

はじめに

本稿は、弘化四年三月二十四日（一八四七年五月八日）の善光寺地震を体験し、記録した人物の史料を素材として、個人による被害記録をめぐる諸論点を考えようとするものである。

近世の災害に際しては、領主権力が詳細且つ統一的な被害状況の把握を行い、これに村役人層が応え各段階で集計された結果、比較的信頼しうる客観的数値を記した一群の史料が存在する。<sup>(1)</sup> これらが歴史地震の科学的分析の資料としても有効なのは周知のことである。しかしこうした史料は、被災地にあまねく存在するわけではない。これらの史料は主として領主による救恤等を目的として作成されるため、あくまでも支配領域単位で作成され、隣接村でも支配関係が異なれば別個に集計された。また、領内での手当金下賜業務には個々の村毎の被災状況を記した帳簿が必須であるが、幕府への報告には領内の被害総数こそが重要であり、多くの場合被害の合計数値のみを記載した届書が作成された。そして諸藩江戸留守居や知識人のネットワークを通じて収集・筆写されて現存するものは多くが後者であり、前者のような村每家毎の被害数が見られる史料は、良質で大量な藩政文書を遺した一部の藩の記録の中か、調査に携わった大庄屋などの文書群として伝

存することになるため、その現存数は後者に比べてわずかであり、断片的にならざるを得ない。

歴史地震の具体的被害を知ろうとするにあたり、個々の村の被害を記す公的記録が得られない場合、被災した個人、あるいは被害を見聞した個人の記録に負う必要が出てくる。もちろん記録者の立場や関心によって、そうした記録の伝える被害の様相は様々である。本稿では、中野村（現中野市中野）で善光寺地震に遭遇した一個人の記録を素材として、こうした記録が伝える情報のあり方や特質を考えていくことにしたい。

## 一 西原九十郎と飯山領浅野村

本稿で主に扱うのは「弘化四丁未年三月廿四日夜天災大地震ニ付委細扣」（以下「委細扣」と略記）、および「大地震ニ付浅野宅打類候節見舞物扣 丁未三月廿四日夜四ツ時」（以下「見舞物扣」と略記）と表題に記された二冊の半紙判の横帳である。<sup>(2)</sup>「委細扣」は表紙とも一八丁、「見舞物扣」は同じく九丁でそれほど大部なものではない。なお「見舞物扣」の表紙は墨で抹消をした形跡があるが、表題と内容に齟齬はないようである。管見の限りではあるが、両史料ともこれまで自治体史や地震資料集類に翻刻紹介されることがない、新出史料である。

「委細扣」の裏表紙には「中野中町西原九十郎」、「見舞物扣」の裏表紙には「古屋九十郎」の名が記されているが、これは天保八年（一八三七）に飯山藩領で起こった百姓一揆「浅野騒動」の頭取のひとりと目され、翌々年刑死した西原九兵衛の遺子西原九十郎（金之助、亦庵）である<sup>(3)</sup>とみてほぼ間違いない。西原九兵衛は浅野村（現長野市豊野町浅野）の庄屋を勤め、天保九年当時の持高一三八石余の地主で、油、小間物などを商う一方、書画にも造詣があり地域の文人サークルにも属する典型的な豪農商であった。<sup>(3)</sup>飯山藩も九兵衛を苗字帯刀御免の用達商人とした一方で多額の用金を課しており、

九兵衛に浅野騒動への連座の嫌疑を掛けたのは、藩債解消のための方便ではなかったかとみる向きもある。

浅野村は千曲川左岸を通る飯山街道の宿場であり、二三疋の宿馬により隣宿神代（現長野市豊野町豊野）と半月交替で継立御用をはたしていた。このため本田高九〇三三八斗のうち二五〇石を「宿場免許高」として免除されている。また千曲川の渡し場としての機能も持つ交通の要衝であった（図1）<sup>(4)</sup>。

浅野騒動の結果、浅野の西原家より「家屋舗 表口五間七尺 但南裏行三拾六間七尺・北裏行三拾六間七尺・裏横五間七尺」「土蔵壹ヶ所 但横貳間・豎三間半」「家財諸道具合九拾八品」「家屋舗壹ヶ所 但南裏行三拾七間六寸・北裏行三拾七間六寸・裏横三間七寸」が本町仲間に預けられ、これを「同人所持仕罷在候当町抱屋舗・出張居宅并土蔵・家財諸道具」と表現している<sup>(5)</sup>。九兵衛家族一同へは「御領分払」<sup>(6)</sup>「家財・家屋敷・田畑闕所」が仰せつけられた。九兵衛嫡子の金之助（九十郎）はこの処分の結果として領外（幕領）の中野に移住することになり、ここで商売や文事の再興に努めていた八年後、善光寺地震に遭遇した。

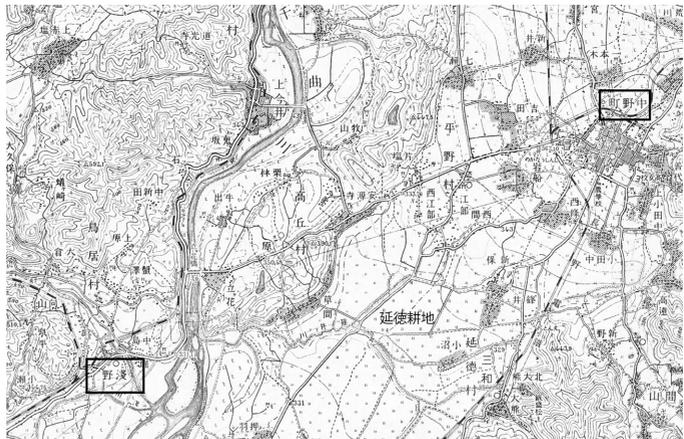


図1 中野・浅野周辺地図（1937年修正測図参謀本部五万分一地形図を一部改変して縮小）

## 二 中野村の「無事」

西原九十郎は「委細扣」の冒頭で次のように記している。

### 【史料1】

弘化丁未年三月廿四日夜四ツ時、天災古今稀成大地震、当所拙宅家内臥居候処、大地震ニ而、表座敷挑灯簷落之、茶間釣棚等落之、皆々打驚早々川端江逃出し、其夜川端ニて一夜明し、翌廿五日町中不残川端江小家を掛、地震火之元之用心大切、小家ニて飯焚仕、打々不分昼夜地震有之、廿四日夜より四月十五日迄出張居候所、三月二十八日夜四ツ時頃、西横町豆婦や清吉宅より出火致し、町内皆大きニ驚、殊ニ南風烈敷折からニ候得共、忽ちもみ消申候、

夜四ツ時（午後十時頃）の地震であつたので九十郎一家は就寝中であつたが、皆で早々に「川端」に逃げ出した。吊り棚が落ちた程度で家屋の被害は記録されていない。九十郎は史料後半部（後掲【史料4】）で「家類山崩も無所ハ、中野、小布施、須坂、上田、小諸、其外在ま合村已」と、中野を始めとしたこれらの町方の被害が少なかったことを特記している。このような記述は他者の記録にも散見され、「一、中野不思議ニ無事と申ス事ニ候」「一、す坂壺人も怪我人なし」「一、小布セも怪我人なし」などと、後述する善光寺や飯山の惨状との対極にこれらの「無難」であつた土地を列挙する言説が、善光寺地震の記録類にしばしばみられる。

実際中野代官高木清左衛門自身が、三月二十五日付の幕府への初発の届書において「陣屋元中野村之儀は損し家等有之候よしニ而、陣屋共別条無御座候」と記したように、<sup>(8)</sup>潰れ家に相当する被害は見られなかったと思われる。

しかし中野村の住人は打ち続く余震の中で家に入れず、翌日から「不残川端江小家を掛」けて過ごし、何より火を出さないように細心の注意を払っていた。この小屋住まいは少なくとも九十郎家では四月十五日まで続いた。三月二十八日の夜には、西横町の豆腐屋から出た火を大勢でもみ消している。地盤の影響でもあろうか潰家が出なかつた中野村でも、避難生活や、火災等の二次被害を防ぐ努力が重ねられ、緊張に満ちた日々が送られていたのであった。

### 三 被害の風聞

続いて九十郎は善光寺での被害に筆を進める。

#### 【史料2】

其外廿四日夜四ツ頃善光寺猶以大地震、其上火事ニテ堂内ハ不及申、町方勿論中後町迄焼失、新町より上へ山門迄、横沢不残、桜小路阿弥陀院西町迄、権堂不残焼失、誠ニ土蔵ニヶ所与残り不申、只々残り助り候所、御本堂、経藏、山門、鐘堂、大勧進、西町西法寺、後町正法寺御堂已すら残不申候、其外打頼不焼候所下西町少々、長野半分、下後町已ニ、誠目ヲ驚し候事、殊ニ御回向中故旅人沢山ニ參詣有之、死人地之人三千人余、旅人数不知、大方七千人程、在方一宿人五六百人、凡於善光寺ニ死人壹万人余之由、誠ニ希有之事ニ御坐候、

周知のように当日善光寺では本尊阿弥陀如来の開帳が行われており、大勢の参詣人が門前町に宿泊していた。四月付で松代藩が幕府に提出した報告での死者数は、寺中大勧進家来が九十二人、大本願家来が四十六人、町家の死者が

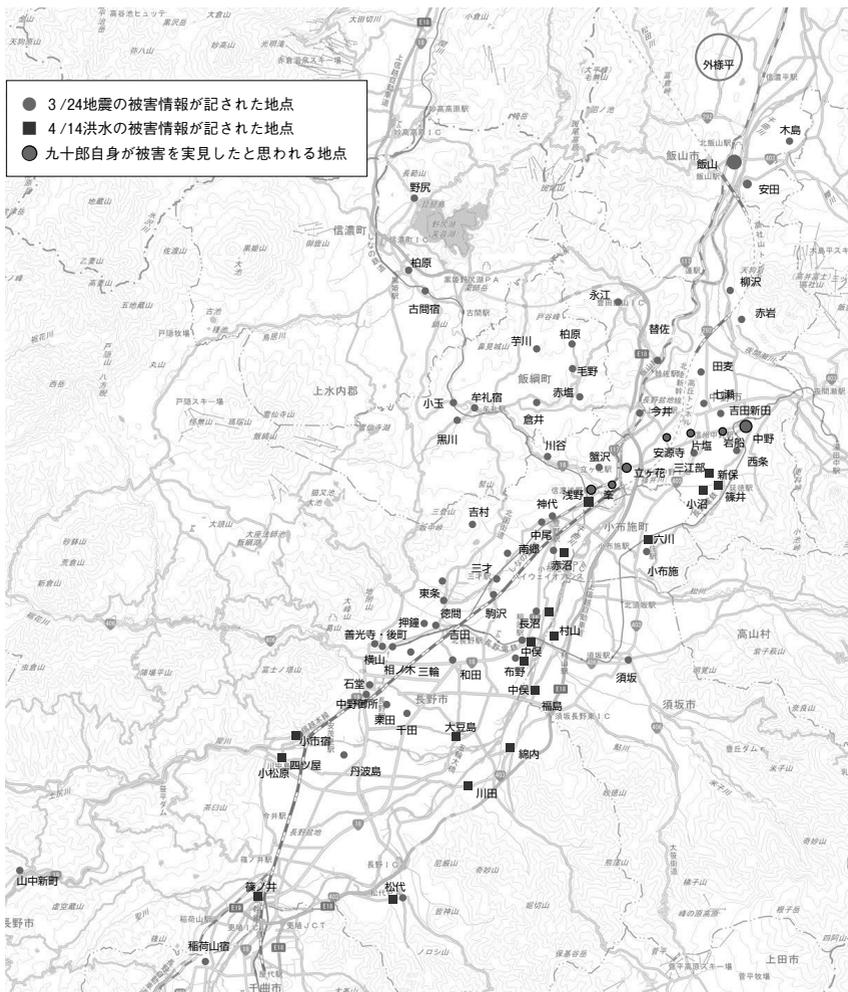


図2 西原九十郎が得た被害情報全体図

千二百七十五人、大本願門前町家が四十四人、止宿旅人が千二十九人等となつており、九十郎の得た風聞はやや過大と思える。しかし松代藩の届けにも「但右之外旅籠屋不残死失候者も有之止宿旅人生死不相分候」とあるように、正確な死者数を計上できる状況にはないことが、一万人死亡という数字にも、あるいは、という信憑性をもたせることになつたとみられる。

さらに九十郎は各地の被害の情報を記載していった。

### 【史料3】

其余在方横山、相之木諸所焼失有之、打頼之所三輪、押鐘、吉田不残つふれ、荒町、徳間、東条所ろくつふれ、又石堂、中野御所辺、栗田、千田、和田、中俣、府野、長沼、赤赤沼、三才、駒沢、南郷同断、神代、中尾ハ多分之つふれ、浅野西夕町方橋向堀古橋場迄不残打つふれ、蟹沢少々、川谷、赤塩、毛野、柏原、永井、替佐、今井所ろく頼、飯山ニ而御城崩、御家中不残つふれ、其上焼失町ハ新町、上町、本町、肴町、愛宕町、伊勢町ハ半つふれ、残町ハ不残打つふれ、其上皆焼失、此辺之咄ニ、一はん善光寺、二はん飯山、三はん稲荷山与申程之事、御家中町方新上本肴町ニて死人六百人程、夫より下も外様辺多分之打頼、木嶋、安田、柳沢、赤岩迄つふれ、七瀬村家数七八十軒も有由、残り候所尼寺、外ニ壺式軒も残り皆つふれ、田麦、片塩、吉田新田、岩船、三江部、西条迄打頼、当御役所書上死人凡六百人程、其内善光寺へ参り候而死去人式百七十人余之由

図2からもわかるようにこの被害情報は、善光寺を出発点として飯山街道方面に進み、飯山城下から外様地方を経て千曲川を渡り、木島平から中野に戻るといふ流れで筆を進めている。なお飯山城と城下町の惨状を述べた後で、傍線部のよ

うに「一番善光寺、二番飯山、三番稲荷山」と、この地震の被害の大きさが巷間で言い囃されている様子を伝えている。このような記述は他の多くの記録にも見え、飯山と善光寺の順位が逆転する例もある。この後に三月二十七日の浅野訪問の記事が続くが、その部分は次章で検討することとする。浅野での実見の記録の後、九十郎は北国街道方面など、さらに居所より西側の被害情報を書き継いだ。

#### 【史料4】

且又吉邨ハカイバミ山崩、押出し、村中七八分通も土中ニ相成、壹二日も助り人ハ不及申、家土中ニ成百六七十人死候事、又候小市宿之上山拔出し、犀川水留り、山中新町辺打つふれの上、又候水底ニ相成、丹波嶋川漸々瀬越か、と位すら水無之由、筑摩川も立ヶ花渡已前より六七尺も少々相成申候、又倉井村、芋川村辺より牟礼宿ハ不残つふれ焼失も少々有之、小玉、黒川、古間、柏原、野尻迄打類、在々山地つふれ申候、其上山々沢々崩水拔出し、用水堰等くつれ、山地とくさせぎ与やら、飯山領分一之堰皆つふれ、長サ八里程之用水皆畑方ニ相成候由、永井辺山押出し家ハ勿論田畑大荒、飯山様御領分山地辺田畑之荒夥し、家類山崩も無所ハ、中野、小布施、須坂、上田、小諸、其外在々合村已、松代ハ少々つふれ之よし、稲荷山は打類焼失ニて千軒程已之由、人間二三百人も助り、残り皆死之由、昔より云伝にも聞ぬ事此廿四日夜之事ニ御坐候、夫より昼夜折々地震誠ニ困入事ニ候

犀川がせき止められて新町（現長野市信州新町）が水没し、一方で丹波島（現長野市丹波島）辺が濁水した旨の記述は他の多くの記録と共通するが、その前に載る吉村（限長野市吉）での家屋埋没の情報も、この「委細扣」に限らず他の多くの記録類に共通して登場する。このような家屋の埋没は所々で起きているにもかかわらず、各地の記録類に吉村の事例<sup>(11)</sup>

が共通して記録されるのは、吉村が北国往還に面しており、往来する旅人や飛脚の手によって殊更に情報が拡散されたためだと考えられる。

九十郎が得た情報はかなり広い範囲に及んでおり、当然そこには彼自身が実見していないものも含まれる。幸い「委細扣」が載せる被災地の範囲には、飯山藩領のほか、松代藩領及び中野代官所管下の幕府領が多く含まれる。このうち松代藩領については、数度にわたり村役人に提出させた被害届が藩政文書内に複数遺されている。また、中野代官所管下の幕府領については、「大地震二付潰家数一村限帳并拜借金員数」という史料が遺されているが、すでに大滝敦士氏の検討により、これは郡中代を勤めた綿貫市右衛門が、四月の洪水後の段階で記録したものであり、中野代官所管下の村々の被害実態を網羅していることが明らかにされている。<sup>(12)</sup> 九十郎が記した被害情報に、これらの公的報告の数値を加えて作成したのが表1である。

一見してわかるように、実際の家屋全壊率と「所々つぶれ」「不残つぶれ」等の記載とに明確な対応関係は見られない。これは多くの地名を列挙した後にまとめて「所々潰れ」などと記しているからでもあるが、実見を伴わない風聞などに頼った結果でもあるとみるべきであろう。他方で見わたせるであろう中野の近村でも、八〇〜九〇%に及ぶ潰家が出た片塩（現中野市片塩）や江部（現中野市江部）を、一〇%台の岩船（現中野市岩船）や吉田（現中野市吉田）と並べるのは不自然であるが、九十郎の眼には中野の西に広がる延徳耕地周辺村々一体が「打類」れたと感じられたのであろうか。<sup>(13)</sup>

#### 四 浅野での実見

地震から三日後の三月二十七日、九十郎は浅野へ向かった。前掲【史料3】と【史料4】の間に、次のような記載が挟まる。

(表1) 各地地震被害風聞

地名	所在地	記述	支配	公式記録等の被害情報		全壊率
				諸堂の外町家	諸堂の外町家219軒焼失、142軒潰、156軒潰のみにて不焼	
善光寺・後町	長野市	堂内ハノ皮申、町方勿論中後町迄焼失…死人甚万人余之由	寺領			
糠山	長野市	焼失				
相之本	長野市	焼失	松代			
三輪	長野市	不残潰れ	松代	350軒程のうち半潰20軒程残皆潰150軒程皆潰の上三分一程焼失	42.9%	
押鎌	長野市	不残潰れ	松代	潰家13軒		
吉田	長野市	不残潰れ	松代	200軒も潰候由ノ皆潰90軒		
荒町	長野市?	所々潰れ				
徳間	長野市	所々潰れ	松代	潰家30軒ノ潰家19軒半潰5軒		
東条	長野市	所々潰れ	松代	家10軒程潰ノ皆潰18軒		
石ノ堂	長野市	所々潰れ	松代			
中野(之)御所	長野市	所々潰れ	松代	潰4軒半潰12軒		
栗田	長野市	所々潰れ				
千田	長野市	所々潰れ	松代	潰家1軒ノ流家1水人不残ノ水人半潰24		
和田	長野市	所々潰れ	松代	居家70軒余之所51軒潰、20軒程半潰	72.9%	
府(布)野	長野市	所々潰れ	松代	潰家5軒半潰2軒	9.0%	
長沼	長野市	所々潰れ	幕領(中野)	77軒のうち流失5軒潰2軒泥水人63軒	21.9%	
赤沼	長野市	所々潰れ	幕領(中野)	32軒のうち潰家7半潰7	32.4%	
三才	長野市	所々潰れ	幕領(中野)	98軒のうち潰家72半潰103	50.0%	
駒沢	長野市	所々潰れ	幕領(中野)	84軒のうち潰家80半潰2	95.2%	
南郷	長野市豊野町	所々潰れ	飯山	潰家23軒		
神代	長野市豊野町	多分之潰れ	飯山			
中尾	長野市豊野町	多分之潰れ	飯山			
浅野	長野市豊野町	西の方橋向堀古(カ)橋場迄不残打つふれ	飯山	丸潰38.9軒		
蘆沢	長野市豊野町	少々	飯山	潰17.8軒ノ潰家15軒		
川谷	長野市豊野町	所々々類	飯山			
赤塩	飯綱町	所々々類	飯山			
毛野	飯綱町	所々々類	飯山			
相原	飯綱町	所々々類	飯山			
水井(注)	中野市	所々々類	飯山			
替佐	中野市	所々々類	飯山			
今井	中野市	所々々類	飯山			
飯山	飯山市	御城居御家中不残つふれ、其上焼失町ノハ、新町・上町・本町・春町、愛宕町・伊勢町ノハ半つふれ、残町ハ不残打つふれ其上皆焼失…御家中町方新・上・本・春町ニ而死人六百ノ多分之打額	飯山	櫓・門等のほか家中侍居室49軒潰、6軒焼失、6軒半潰、城下蔵54軒焼失、67軒潰同山崩にて泥寇等々		
外縁辺	飯山市	多分之打額	飯山			

木嶋	飯山市	つふれ		幕領(中野)	284軒のうち潰家21半潰40(上木島)	7.4%
安田	飯山市	つふれ		幕領(中野)	75軒のうち潰家51半潰15	72.0%
柳沢	中野市	つふれ		幕領(中野)	125軒のうち潰家14	11.2%
赤岩	中野市	つふれ		幕領(中野)	133軒のうち潰家36半潰42	27.1%
七瀬	中野市	家数七十八軒も有田残り候所寺外二宮三軒も残り皆つふれ		幕領(中野)	94軒のうち潰家76	80.1%
田麦	中野市	打類		幕領(中野)	104軒のうち潰家28	26.9%
片垣	中野市	打類		幕領(中野)	86軒のうち潰家83半潰3	96.5%
吉田新田	中野市	打類		幕領(中野)	105軒のうち潰家13半潰5	12.3%
岩船	中野市	打類		幕領(中野)	48軒のうち潰家5	10.4%
三江部	中野市	打類		幕領(中野)	東西江部で109軒のうち潰家90半潰19	82.6%
西条	中野市	打類		幕領(中野)	79軒のうち潰家17	21.5%
吉村	長野市	カハバ山崩押し出村中七八分通も十中二相成、廿二日も助り人い不及甲、家土中二成百六十人死候事		飯山	51軒のうち40軒潰れ土中	78.4%
小市宿	長野市	山抜出し、屋山水留り		松代	114軒のうち潰家70/流失100	61.4%
山中新町辺	信州新町	打つふれの上、又候水底二相成、近村三四十ヶ部水底二成		松代	400軒ほどのうち潰家200程	50.0%
丹波嶋	長野市青木島町	川瀬さ瀬越か、と位すら水無之由		松代	140軒のうち潰家6半潰多数	4.3%
立ヶ花渡	飯綱町	已崩つふれ焼失も少々有之		飯山	62軒のうち潰家6	
倉井	飯綱町	不残つふれ焼失も少々有之		潰家30	潰家30	96.3%
宇川辺	飯綱町	不残つふれ焼失も少々有之		幕領(中野)	189軒のうち潰家182	96.3%
牟礼	飯綱町	不残つふれ焼失も少々有之		幕領(中野)	81軒のうち潰家81	100.0%
小玉	飯綱町	打類		幕領		
黒川	飯綱町	打類		幕領(中野)	109軒のうち潰家104半潰3	95.3%
古間宿	信濃町	打類		幕領		
相原	信濃町	打類		幕領(中野)	233軒のうち潰家83半潰60	35.6%
野尻	信濃町	打類				
とくさせぎ		長サ八里程之用水皆畑方二相成候				
水井辺	中野市?	山押出し家ハ勿論田畑大荒		幕領(中野)		
中野	中野市	家類山崩も無所		幕領(中野)		
小布施	中野市	家類山崩も無所		松代頂		
須坂	須坂市	家類山崩も無所		崩家4		
上田	上田市	家類山崩も無所		上田		
小諸	小諸市	家類山崩も無所		小諸		
松代	長野市松代町	少々つふれ		松代		
稲荷山	千曲市	打類焼失にて千軒程已之由、人間二三百人も助り、残り皆死之由		上田	434軒のうち200軒焼失	

「弘化四丁未三月廿四日夜天災大地震二付委細扣の他、「豊野町」の資料二』、東京大学地震研究所編「収取日本地震史料 第5巻 別巻6-1』、大滝敏士「善光寺地震に  
おける中野代官所村々の被災状況」より作成

【史料5】

廿七日下拙浅野江参候節、中野原より向岩船初青木坂迄、助り候家通り之内五六軒すら無之、在方見渡候処、片大徳寺其外廿軒程も助り居候、誠天災とハ乍申余り大變之事也、夫々表安源寺ハ格別事無之、立ヶ花少々之つふれ、渡船ヲ越峯ニて一両軒、高岡平兵衛初堀橋場通り皆つふれ、大橋落、大倉橋ヲ渡り漸々浅野参り候所、母上さま無難、橋側嘉市より町通り西之方迄助り候家僅十二三軒すら、其下ハ多分之つふれも無之、浅野ハ助り候町、半ツブレ残り候所、喜兵へ、利助本家、重藏本家、宗七、茂作、健二郎、久之丞、利右衛門本家土藏、弥五八、文左衛門土藏三ヶ所、重兵へ土藏、勇左衛門土藏二、拙宅本家新藏質藏、弥三郎、増兵衛、久左衛門土藏、吉三郎土藏、佐左衛門不殘其儘、大日堂、正見寺本堂、経藏、鐘堂、長家、兵八本家、与七、明圓寺御堂、新右衛門物置、重左衛門、助太郎、伊兵衛、吉藏土藏、惣治郎本家已之事、浅野村死人三十人余之事ニ而、(中略、ここに【史料4】が入る)

一、麻重家内浅野二三人内叔母老人文左衛門宅ニ而打つふれ死す、善光寺家内七人之所利吉、まつ、友治郎、儀三郎、番頭新藏、太吉六人つふれ死す、内宝(マ)いと一人助り、廿五日昼頃浅野へ尋参り候

一、久左衛門宅つふれ久左衛門死、外二下女老人死す

一、清之助宅母そよ孫ヲ抱ながらつふれ死す

拙宅母上始ふき兩人逃出、古清も三人つふれ候得共被出掘、老人も死人無、誠難有、外別家も東条、大くら、飯山共二死人無之、実ニ難有仕合ニ奉存候

拙宅打類分油藏、挽屋、門口、薪藏、宝、表門、馬家、下家、粕藏、裏門、長屋、メ十一ヶ所皆類れ

中野を出て先の表1で全壊率九六・五%だった片塩くらいまでの間は、道の両脇に残っている家が五、六軒、八六軒の家があるはずの片塩村では、寺のほかにも二〇軒ほどしか家が残っていないという有様で、「誠天災とハ乍申余り大變之事也」<sup>(14)</sup>

と述懐を述べるが、その先の安源寺村（現中野市安源寺）は「格別事無之」（七一軒中潰家二四、全壊率三三・八%）<sup>(15)</sup>、立ヶ花（現中野市立ヶ花）も「少々潰れ」（六二軒中潰家六、全壊率九・七%）<sup>(16)</sup>という表現になる。こうして道を進み千曲川に近づく毎に、片塩などに比べて被害の少ない村に出会う記載は、「中野扇状地の扇端部と長丘丘陵沿いの村々で大きな被害が出ている」という客観的事実とよく符合している。

九十郎は千曲川を渡り飯山領に入る。蟹沢村（現長野市豊野町蟹沢）と浅野村との境にある鳥居川の「大橋」が落ちており、上流の大倉（現長野市豊野町大倉）をまわって浅野に入った九十郎がみたものは、橋側から西の町通りに掛けて一二三軒しか残っていないものの、その他は半潰れなどで家が残っている姿であった。

これまで浅野村の被害については、次の史料の存在が知られている。

#### 【史料6】

（前略）丁未三月廿四日晚四ツ時頃大地震ニ而大地一時ニ持上ケ、家居即座ニ押潰、拙寺ニ而ハ庫裏丸潰、其外廊下又は護法閣相潰、本堂ハ裏通地形式尺余下り、大ニかしがり候、鐘堂は柱抜、已に覆ル計ニ而止り、又石垣ハ拾ヶ所余茂壞れ、又村方ニ而も即死之者三拾六人程、丸潰三拾八九軒、夫々橋落向通不残潰候、大倉ハ格別損シ無之、蟹沢ハ拾七八軒も潰申候、夫々神代、善光寺辺迄大ニ潰（中略、善光寺の様子および虚空蔵山抜の様子）四月十三日七ツ時頃河中嶋へ押出し、此辺江ハ其夜の六ツ半頃水参り、前代未聞之満水、川中嶋より川岸村々家・土蔵・家財道具流失、殊ニ小市村酒屋五尺桶百本余流し、此辺ニ而も止候由、穀類・着類皆泥に致し誠ニ迷惑ニ及ひ候由、当寺山内ハ大門石垣際迄水付、明円寺ハ床々水際同様ニ相成り、おやい・兵八は床上江壹尺余も上り候（後略、飯山城下、吉村の被災について）

これは浅野村正見寺の住職が記した記録で、やはり橋の周囲が大きな被害を受けていたこと、浅野村では三八、九軒が潰家となり三六人が即死したことが記されている。浅野村では地震の前年弘化三（一八四六）年の家数は高持一三五、水呑五の計一四〇軒、総人数六六三人であったから、この数値を仮に用いると、三九軒丸潰れ、三六人死亡とすると全壊率二七・九%、死亡率五・四%となる。千曲川右岸の惨状を眼にしてきた九十郎はこれを「浅野ハ助り候町」と表現したのである。

【史料5】に戻ってさらに重要なことは、浅野には九十郎の「母上」が居り、人的被害は無かったが、その居宅が被災していることである。先述したように浅野騒動の結果、九十郎母、つまり西原九兵衛の妻は他の家族とともに追放刑に処せられ、屋敷や田畑は闕所となったはずである。弘化四年までの間に、何らかの形で救免があったと考えざるを得ない。しかも被災した建物は「油蔵、挽屋、門口、薪蔵、宝、表門、馬

(表2) 寺々ツブレ扣

地名	寺院	建物	被害	地名	寺院	建物	被害
浅野	正見寺	庫裏	○	吉田	善教寺	庫裏	○
		廊下	○		天照院	客殿	○
		護法閣	○		庫裏	○	
		御堂	△	善光寺	勸教寺	本堂	○
	明円寺	庫裏	△		客殿	○不残焼ル	
大日堂	庫裏	△	高楽寺		本堂	○	
片塩	命徳寺	御堂	○		庫裏	○焼ル	
		鐘堂	○		寺内	○同断	
		庫裏	○	堂内	上中下不残焼ル		
江部	健立寺	物置	○	西法寺	客殿	○	
		客殿	○	本堂	△		
蟹沢	龍沢寺	堂堂	○	明教寺	本堂	○	
		庫裏	○		庫裏	○焼	
神代	龍源寺	持専寺		正法寺	庫裏	○	
		客殿					
	御堂	○					
	円徳寺	庫裏					
		御堂					
	經蔵						
正伝寺	御堂	○					
	庫裏	○					

○ 皆潰  
△ 半潰

家、下家、粕蔵、裏門、長屋、メ十一ヶ所」であり、騒動前と同様油商売等を引き続き行っていたとみられるのである。地震そのものからは離れるが、本史料によって、浅野西原家の歴史を再評価する必要が浮かび上がってきたといえるだろう。

なお本史料からは具体的な被災者の人名が判明する。その居住地比定等は今後の課題であるが、従来から知られていた正見寺文書と合わせて利用することで、浅野村の被害実態が相当具体的に判明する可能性がある。

【史料5】の後には表2のような記載が続く。【史料6】からも浅野正見寺と明円寺の被害はわかり、内容も一致するが、ここでは大日堂も被害を受けていたことが判明する。さらに片塩・蟹沢・江部・神代・吉田といった近隣の村々の寺院のみならず、善光寺とその寺中の被害にまで筆が及んでいる。いかなる関心からこの記載が成されたかは未詳である。

さらに犀川の天然ダム決壊による四月十三日の洪水

(表3) 水害風聞・実見

小松原	長野市篠ノ井地区	押流し、向水先篠乃井迄川中嶋ヲ押し倒し、大荒にて、
小市宿	長野市	道下老丈も堀大石大岩小石荒砂等押し出し、幅四五丁長一里程之所打荒し
松代	長野市松代町	満水已無大荒
川田	長野市若穂地区	満水已無大荒
綿内	長野市若穂地区	満水已無大荒
福嶋	須坂市	満水已無大荒
村山	須坂市	家五六十軒も流し
豆嶋(大豆島)	長野市	不残満水
四ッ谷	長野市川中島町	不残満水
府(布)野	長野市	不残満水
中俣	長野市	不残満水
長沼	長野市	不残満水
赤沼	長野市	不残満水
浅野村	長野市豊野町	浅野村前沖猶更下夕町迄入り、明圓寺様床下、佐左衛門庭先かけ、勇左衛門土蔵土台側迄、堀辺河野屋庭先髪結迄、誠ニ大満水
小沼	中野市	(水入)
新保村	中野市	廣願寺迄(水入)
篠井	中野市	郷中五六尺水入
六川辺	小布施町	本川筋にて八家蔵ハ如山、大木ハ根共流れる有様筆紙難尽、人馬数百人水死、六川辺家土蔵物置類沢山ニ留り
南郷	長野市豊野町	郷沖江藁凡一万駄も有

の記事が続くが、本稿ではスペースの関係上その部分は表3として示した。この表からみても、湛水についての漠然とした風聞の一方で、浅野村、そして居所中野村周辺の地で、どの程度水が入ったかを具体的に記していることが注目される。以上、本史料は在町の一豪農商が収集し得た広い範囲の情報的事例として意味をもつものの、情報そのものの正確性という意味では、自身が直接体験した範囲と伝聞や印象を語った部分とは、大きな隔絶があることが判明した。

## 五 被災家屋の普請をめぐつて

もう一点の史料「見舞物扣」は次のような記載から始まる。

### 【史料7】

屋敷之内

薪蔵 二間半  
六間 打頼ル

油宝(アヤ) 馬 五間  
門口

油蔵 挽屋 二間半 七間

粕蔵 裏門 二間 五間

長家 二間半  
八間

メ九ヶ所不残打つぶれる

本家、新蔵、質蔵ハ半つぶれ程之事ニ御座候

四月六日

ふのや

一 当百壺枚

永蔵

六日

一 酒貳升

蓮念寺

竹の子六包

同

西原

一 同貳升

惣治郎

四り張八百カメ

同

菱屋

一 水餅小

儀兵衛

壺箱

同

西原

一 酒壺升

佐左衛門

向ノ

一 同壺升

弥三郎

十一日 岩井村

一 曲柄杓五合壺本 吉左衛門

汁杓子壺本

飯杓子

柏屋

一 小さる壺ツ 安右衛門

柏屋

一 中さる壺ツ 由之助

萬屋

一 米上ざる壺ツ 浅五郎

東

一 焼飯壺飯次 傳兵衛

上浅野

一 蕎麦粉壺飯次 幾右衛門

冒頭部分は浅野の屋敷における被災の様子である。前掲【史料5】の末尾とやや記載のあり方が異なるが、基本的には同等の被害状況を示しているとみてよい。そしてこれら潰れた建物のほか「本家、新蔵、質蔵」が半潰れであるという情報も重要である。すなわちここからは、この時点での浅野西原家が、単なる九十郎母の隠居所というようなものではなく、油製造や利貸しなど複数の部門を備えた商家経営を行っていたことが、想定できるからである。

記載の後半は酒や日用品など、罹災に対する見舞い品の控えであると判断できる。ところがその次の部分から帳面の記載は一転して様相を変える。これをまとめたのが表4であるが、ここからわかるように、これ以降記されているのは明らかに単なる見舞い品ではなく、瓦を中心とした建設資材である。先述した表紙の抹消も、あるいはこうした帳簿の性格の変化と関係している可能性がある。

ここで注目されるのはやはり、善光寺地震で罹災し再建された浅野村西原氏の建造物が、瓦葺きであったということであろう。史料冒頭に見えるように、潰れた建造物は蔵が多いが、これらすべてが瓦葺きの土蔵であるのかは判然としない。前述したように浅野は単なる農村ではなく、街道に面した宿駅の機能を持っていた。そのような土地における瓦屋根の被災と修築の具体例が判明するこの史料からは、一般農村とは異なる様相が浮かび上がってくる可能性がある。

### おわりに

以上本稿では、信濃善光寺地震に関わる二点の新出史料を素材として検討を行った。そこから得た結論は、単なる風聞と実見とでは情報の質が異なる

(表4) 家修復関係記述

瓦六寸足改沓坪七十枚ツ、ナリ 高屋敷瓦六寸足相改候	
平沓ばん西東八十四枚ツ、三通り 同式はん百十式米ツ、四通り	
棒瓦三十三枚 中鼻五拾九枚 下ヶ平百四十八枚 箱五枚 ぐしき式枚 鼻平ラ五枚	
由兵衛積口扣	瓦各種 1247枚
大倉村伝兵衛殿	瓦各種 2119枚
上アサノ作四郎殿	瓦各種 156枚
松野屋要蔵殿	瓦 500枚
髪結小吉殿	瓦 238枚
市左衛門殿	瓦 336枚
武政方へ	柱材類 14
市左衛門殿	柱材 1
久左衛門	柱材 4
川谷村伝之丞殿	瓦 162枚
はしば了覚	瓦各種 1969枚

という、ありふれたものであるようにも思われる。

しかし九十郎は被害の全貌を概観する中で一円に「打頼れ」と表現した村々も、浅野行きの実見の中では個々の村の被害の違いに目を向けた記録をしている。ただしそれでも公的記録と比べると差異があり、村役人の調査により判明するような被害実態は、通行者には見えにくい部分がある、という論点を引き出すことも出来るであろう。一方で九十郎の記録からは、居所中野や故郷浅野について、公的史料には隠れて見えない豊富な実態を窺うことが出来る。潰家何軒、死者怪我人何人、という客観的数値の下に隠れて見えない被災や対応の実態もまた、我々が歴史地震史料から学びとるべき重要なメッセージである。

(付記) 本稿はJSPS 科研費 17H02385 の助成を得た成果の一部である。また、本稿の作成に当たり長野県中野市立博物館 学芸員大滝敦士様、正見寺御住職窪智紹様、また中野市立図書館、長野市公文書館の皆様にお世話になりました。末尾ながら記して感謝の意を表します。

- 1 こうした種類の資料の作成のされ方については、筆者もこれまでいくつか検討をしている。拙稿「新発田藩による文政越後三条地震への対応をめぐって」(『災害・復興と資料』九号、二〇一七年三月)、同「文政11年越後三条地震からみる広域災害情報の集積」(『災害・復興と資料』八号、二〇一六年三月)、同「江戸藩邸をめぐる災害情報の流通について——宝永地震・宝永富士山噴火を中心に——」(『災害・復興と資料』六号、二〇一五年三月)、等
- 2 この二冊は古書店より新潟大学が購入したもので現在原が管理している。
- 3 以下浅野騒動と西原家については西原三郎編著『実説信州飯山騒動』(一九七二年、飯山騒動刊行会)、豊野町誌刊行会編『豊野町の歴史 豊野町誌2』(二〇〇〇年、豊野町誌刊行会)、豊野町誌刊行会編『豊野町の資料 二 豊野町誌6』(一九九六年、豊野町誌刊行会)による。
- 4 享保九年八月「信濃国水内郡浅野村指出し明細帳」(前掲『豊野町の資料 二 一三五頁])
- 5 天保十年一月「奉差上御請書之事」(前掲『豊野町の資料 二 一三二頁])
- 6 天保十年一月「申渡」(前掲『豊野町の資料 二 二二九頁])
- 7 「弘化四年信州大地震取調書」(東京大学地震研究所編『新収日本地震史料 第5巻 別巻6-1』一九八八年、日本電気協会、四七〇頁)
- 8 三月廿五日付「中野初度御届」(弘化丁未信濃国地震山川崩激之記并図)所収(『新収日本地震史料 第5巻 別巻6-1』四七〇頁)
- 9 「私支配所信州水内郡善光寺先月廿四日夜亥刻過大地震ニ而寺内并同寺家来居家町家震潰候上出火ニ付死失人其外在家震圧死人等覚」(弘化四未年大地震一件)所収(『新収日本地震史料 第5巻 別巻6-1』九頁)
- 10 外様とは飯山藩領の地域区分で、城下よりも北東越後寄りの地域をこう呼ぶ。
- 11 「信越地震水記」(新収日本地震史料 第5巻 別巻6-1)五八三頁)等
- 12 大滝敦士「善光寺地震における中野代官所村々の被災状況」(『信濃』第七〇巻第四号通巻八一二号、二〇一八年)。なお当該史料の原本については大滝氏のご助力を得て中野市立図書館にて原本を閲覧確認した。
- 13 洪水被害が反映されているか居ないかの違いと考えることも出来るかも知れないが、「見聞扣」は日を追ってリアルタイムに書いたものではなく後日まとめ書いて書いたものであることが筆致等からも窺えることから、九十郎の被害程度認識には洪水後の様子も含まれているとみて良い。
- 14 公的記録には潰家八三軒とあるので、その後の洪水などを経て更に十七軒ほどが潰家になったのであろう。
- 15 前掲「大地震ニ付潰家数一村限帳并拝借金員数」及び大滝論文

- 16 同前
- 17 前掲大滝論文五六頁
- 18 前掲『豊野町の資料 二』二三八頁。なお今回正見寺様のご厚意により原本コピーを拝見し表記を若干改めた。
- 19 前掲『豊野町の歴史 豊野町誌2』